

私は歌う 愛を信じて

千秋昌弘/詞

去年（2018年）2月から3月にかけて、寒い日が続きましたが、連日のように、シリアで罪もない子供たちが、爆撃を受け負傷し、死んでゆくさまが報道されました。また職場で社会の矛盾を嫌というほど感じ、言いようのない虚しさや憤りのなか、思いを書き綴りました。その詩に、森二三さんが曲をつけてくださいました。私にとっても、森二三さんにとっても初めての作詞、作曲でした。何度か推敲を重ね、歌います。

「私は歌う、愛を信じて」（千秋昌弘）

私は歌う あなたと歌う
平和な地球 愛を信じて

何で罪無き人が死に
何で働くものの死が
忘れ去られるのか
どうしてなのか

社会の片隅でまじめに生きる
その声はどうして
消し去られてしまうのか

私は歌う 声なき声を
拾い集めてみんなと歌う

真実が光り輝き
人がそれらを 優しく受け止め

大きくなり広がり
そして
世界を包み込みますように
限りある時間
しかし それは無限の時間
その中で私は
最後を生きるだろう

私は歌う 声なき声を
拾い集めて みんなと歌う
世界を包む愛を信じて

私は歌う 平和な地球
世界を包む愛を信じて

Ah Ah Ah - Ah -

はたらけど

石川啄木/詩

当時、啄木は家族4人を養うため、病弱な身体にむち打って新聞社で働いていた。この作品には当時の社会主義思想の影響も感じられるが、直截的でなく「ちっと手を見る」という表現により、多くの人々の愛唱するところとなっている。

はたらけど
はたらけど猶わが生活 楽にならざり
ちっと手を見る

花の歌

（お前が投げたこの花は）

ビゼー作曲のオペラ「カルメン」の第2幕、カルメンを愛しているドン・ホセによって歌われるアリアである。「お前が投げたこの花は」の題名でも呼ばれる。

色あせたこの花
牢屋でも抱きしめていた
枯れ果て あせても
香りは消えない

その香りの中で まぶたに浮かぶ
香りに酔いしれ この胸はときめく
恋しさに悶えつつ 恋を呪う惨めさ
あの時の出会いが すべてみな
この身を ああ！
この心あざけり この心 嘆いて
ただ一人夢見た お前のこの花

ただ会うだけ ただ一目 カルメン
恋しさゆえの 俺のこの願い
どうぞ優しく受けて
ああ カルメン
この命かけて カルメン
愛す カルメン

オラトリオ 鳥の歌 一序一 峠 三吉/原詩

オラトリオ「鳥の歌」は“ヒロシマ”の表現にこだわり続けている尾上和彦が、ヒロシマを詠った五人（峠三吉、原民喜、土屋清、栗原貞子、ナジム・ヒクメット）の詩から構想した作品で、「序」はその中の1曲。毎年8月に開催されるアニュアルコンサート「八月の祈り」で、30年以上途切れることなく演奏されている。

ちちをかえせ
ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ
わたしをかえせ
わたしにつながる
にんげんをかえせ
にんげんの
にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわを
へいわをかえせ